国家が崩壊する時

内山 節　（哲学者）
プロフィール
1950 年、東京生まれ。哲学者。1970 年代より東京と群馬県上野村を往復して暮らしている。主な著書に『労働過程論ノート』『哲学の冒険』『時間についての十二章』『森にかよう道』『貨幣の思想史』『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』などがある。主要著作は『内山節著作集』（全 15 巻、農文協）に収録されている。

歴史を振り返ってみると、ひとつの国家のかたちが崩壊する要因としてはいくつかのケースがあることがわかる。
そのひとつは大災害や疫病の大流行によって国家が衰弱したときで、古くはこのケースが何度となくあった。
第二は戦争の敗北によって占領され、それまでの国家の体制が終焉を迎えたときであり、1945 年の日本の敗戦もそのひとつだった。
さらに第三の要因としては、これまでの国家体制が時代の変化に合わなくなったという問題がある。たとえば日本の歴史をみるなら、荘園制の衰退と武士の台頭が古代社会のかたちと合わなくなり、それは古代国家を崩壊させた。
第四のケースとしては、開発独裁型の政治が行き詰まり社会が不安定化したときで、このときは暴動などによって国家は内部崩壊することが多い。
独裁的な権力によって経済開発が強引にすすめられ、それが旧来の社会の安定をも崩壊させながら、経済開発の果実を国民に行き渡らせることができないときに起こるもので、清潔な政治がおこなわれたにもかかわらずこのような事態を招くことも、一部の人たちに利権が集中し腐敗を伴いながら行き詰まるときもあるが、途上国ではしばしば起こるかたちである。
第五に社会のさまざまなシステムが国家の下で統制され、その結果として国家依存型の社会がつくられることから生じる国家の崩壊がある。
国民が国家に依存し、いわば国家にぶら下がるかたちで生きるがゆえに、国家があたかも共同利益構造であるかのごとく体制がつくられ、そのことが国家に対する批判機能やチェック機能を麻痺させるときである。
このケースではいっとき独裁的な国家権力がつくられるが、「共同利益構造」がうまく機能しなくなったときにその国家は崩壊する。1991 年のソ連崩壊にいたるソ連、東欧諸国で起こった事態は、これにあたると考えてよい。
第六の要因は国家が内部から腐っていくケースで、国が国民の信頼を失っていくときである。このケースでは国民の国家に対する虚無感が広がり、しばらくは

静かな国家離れがつづくが、何らかのきっかけが生じると大きな社会変革運動が起こる。
だが実際には、このように整理しただけでは不完全なのである。なぜなら国家が崩壊していくときには、ひとつの要因だけでそれが起こるわけではなく、いくつかの要因が複合的に発生して起こることがほとんどだからである。
さらに述べれば、国家と国民という構図自体のなかに、国家が腐っていく要因が潜んでいるといってもよい。
ワルシャワ発の車内で見た衝撃の光景
1980 年代後半のある日、私はベルリンからパリに向かう特急列車に乗ったことがあった。
この路線はそれまでも何度か乗っていたのだが、この日の列車内の様子には驚かされた。床はそこら中にゴミが散乱している。それも食べかけのパンが多い。端を少し食べただけのパンがいたるところに投げ捨てられているのである。
食べ物を捨てることには私たちは多少は抵抗感があるものだが、この列車内の捨てられ方はすさまじい。
驚いている私の表情をみて、近くの席にいた人が「ひどいですね」と話しかけてきた。そしてつづけた。
「この列車はワルシャワ発なのですよ」

当時は東欧諸国で民主化運動が起こっていた頃で、その動きは後にソ連、東欧諸国の崩壊へと向かわせることになった。ポーランドは民主化運動の最先頭に立っていた国である。そのポーランドの首都、ワルシャワからこの列車は出発していた。
それはこういうことだった。
当時の社会主義諸国では生活上必要な物資は、国家の手によって安く提供されていた。パンはその代表的なものである。その結果、国民にとってはパンを大事に食べる必要性がなくなっていた。
パンの多くがゴミにされ、この状況下でパン不足を招かないようにするために、国はパンの大量生産をしなければならなかった。
ところがそうやってつくられたパンはまずく、それが国民の怒りを買った。ますますゴミにされるパンはふえ、ますますパンはまずくなっていく。そういう負の連鎖が起こっていたのである。
チェコスロバキアなどでは、政府が国民に別荘を与える政策がすすんでいた。土地と狭い小屋をつくる組み立てキットを政府が提供し、小屋は自分でつくるとい

うやり方だった。もっと広い建物がほしいのなら、それは自力でつくるという方法である。
この別荘を手に入れた人たちは、自分で敷地内にプールをつくることが多かった。それが水不足を招いた。水がただ同然のように安かったから、多くの人たちがプールの水を流しっぱなしにしたのである。そして水不足は、国に対する国民の怒りを高めていった。
同じようなことがルーマニアでも起こっていた。電気が安いこのから、誰も節電をしない。政府は不必要な電気は消すようにという指導をしていたが、多くの人たちがそれに従わなかった。それは電気不足を生み、しばしば起こる停電が国民の怒りを買った。
末期のソ連、東欧諸国で起こっていたのはそういう事態だったのである。
もちろん、だからといって私は政府に同情しているわけではない。そういう体制をつくり、国民が国家にぶら下がって生きる社会をつくったのは政権の側である。その結果訪れた末期は、あまりにも悲劇的だった。もっとまともに提供しろという要求ばかりが国民のなかから巻き起こったのである。
「理念は消えてしまった」
ベルリンの壁が崩壊するひと月くらい前に、私は東ベルリンを訪れていた。
東ドイツが社会主義国であった時代から、東ベルリンは簡単には入れるところだった。まずは西ドイツの領内だった西ベルリンに向かう。そこから東ベルリンに行く高架鉄道などに乗る。
そうやって東ベルリンに入ると、駅でその日の 24 時まで有効なビザを売ってくれる。このビザで入れるのは東ベルリンだけなのだが、特に審査はなく切符を購入するような感じで売られていた。
滞在期間を延ばしたり東ベルリン以外の場所に行きたいときは、東ベルリンにあるインターナショナルツーリストビューローに行って、滞在先のホテルを予約する。ホテルの予約証をもって滞在申請をすると、2 時間くらいでホテル予約がある範囲のビザを発給してくれる。そんな仕組みが東ベルリンにはあった。私は何度か東ベルリンに出かけたものだった。
東ドイツでも民主化運動が広がり、ベルリンの壁が崩壊するひと月前といえば、東ドイツの終焉が近づいていた頃である。その日も東ベルリンの広場で集会があり、私もその様子をみていた。
と、60 歳くらいの男の人が話しかけてきた。
「日本人ですか」
「そうです」

そんな会話があり、彼は悲しそうに話しはじめた

彼は初期から民主化運動をしていたそうで、もともとは人間的な社会主義をつくる運動だった。民衆が権力をもつ自由な社会主義社会をつくるということである。
だがその運動が盛り上がり、東ドイツの政権が崩壊しようとしているとき、何が起こっているのか。
「この集会をみてくれ」と彼は言った。「いまでは数十人しか集まらなくなった」。
「いまの東ドイツには、資本主義になれば儲かるという話ばかりが盛り上がりをみせている。新しい社会をつくろうという理念は消えてしまった。われわれは消えてしまいそうなくらいに孤立している。
ほとんどの人は、これまで政権に代わる新しい主人を求めているだけだ。もっと多くのものを提供してくれる主人をだ」
確かにその頃の東ベルリンにはそんな雰囲気が広がっていた。
言論の自由よりも、今日の安寧…
誤解を招きやすい言い方かもしれないが、言論の自由がなくても人間は生きていける。
日本の人々も戦前の社会を生きていくことができたのである。最後は破滅的な敗北によって、生きていくことさえ危機に立たされたのだが、もしもそういうことがなかったら、ほとんどの人は言論の自由がない日常を、困ることなく生きていたことだろう。
現在のニュースをみてもそうだ。安倍政権の下で生きていこうとする政治家や政府ににらまれたくない官僚たちは、みずから言論や思想の自由を放棄している。そうやって生きているのである。
この構造は企業などでも発生するが、自分の利益や保身のためには人は容易に言論の自由などを放棄する。そしてそれが国家を腐らせていく。
この構図からみえてくるものは、国家あっての国民というかたち自体のなかに、国家の崩壊が準備されているということである。
国家がシステムをつくればつくるほどに、国民の国家への依存度はましていく。そして国家に依存する度合いが高まれば、その国家のなかで生きるすべを国民は手に入れようとする。言論や思想の自由がなくても、そんなことより今日の安寧なのである。
そしてこのかたちの深まりが、一方では国家の独裁権力化を促進させ、他方でその権力の下で生きようとする人々を生みだしていく。

この相互構造が国家を腐らせる。
近代に誕生した国民国家も、この構造を改革することはなかった。だから今日でも、国家の独裁権力化が少しずつすすみ、自分たちにより多くのものを提供してくれる政治家を望む動きが生まれつづける。
かつての社会主義諸国の崩壊が、より多くのものを提供してくれそうにみえた資本主義へのなびきによって進行したのと同じ構図で、アメリカではトランプ政権が誕生し、ヨーロッパでは国家主義勢力が力をつけている。日本でも安倍政権の支持率が高かったのは、民主党政権よりもより多くを提供してくれそうな政権にみえたからである。
とすると国家の黄昏は、国家と国民という構図自体が不可避的に発生させるものだということができる。